

緑茶の嗜好についての調査アンケートの集計と簡単な分析

萩原克幸

三重大学教育学部

A summary of questionnaire about preference for green tea

Katsuyuki Hagiwara

Faculty of Education, Mie University

要旨

三重県で生産されるお茶の総称を伊勢茶といい、地域ブランドとして登録されている。三重県のお茶の生産量は2020年度調査では全国3位であるにも係わらず、その知名度はそれほど高くない。一方で、三重県地方自治研究センターにおいて、「地域ブランド化の取組研究会」が設立され、地域ブランドとしての伊勢茶に着目した取り組みがなされた。その中で、客観的データ収集を目的として、緑茶を主とした飲料に対する嗜好の調査アンケートが実施された。本報告では、特に、緑茶を好む人とそうでない人の違いに着目して、そのアンケート結果の集計と簡単な分析を行った。その結果、一般的には、年代により飲料の嗜好が異なり、緑茶は年代の高い層で好まれる傾向にあることが明らかとなった。また、緑茶を好む人とそうでない人の間では、緑茶を飲むシーン、緑茶を飲む理由および重視する緑茶の特徴が異なることなどが明らかとなった。

キーワード：飲料の嗜好、緑茶、アンケート調査、データ集計

1 はじめに

お茶は日本を代表する飲料であり、古くから親しまれてきた。三重県で生産されるお茶の総称を伊勢茶といい、地域ブランドとして登録されている。農林水産省によると、三重県の2020年度の荒茶（お店で販売する製品になる前の段階まで加工されたお茶）の生産量は、静岡県（2万5,200[t]）、鹿児島県（2万3,900[t]）に次いで第3位（5,080[t]）である（<https://www.maff.go.jp>）。（<http://www.mie-isecha.org>）。しかしながら、全国的には、伊勢茶の知名度はそれほど高くない。

一方で、三重県地方自治研究センターにおいて、「地域ブランド化の取組研究会」（平成31年度～令和2年度）が設立され、地域ブランドとしての伊勢茶に着目し、その普及を目指した取り組みがなされた。その中で、客観的データ収集を目的として、緑茶を主とした飲料に対する嗜好の調査アンケートが実施された。本報告では、特に、緑茶を好む人とそうでない人の違いに着目して、そのアンケート結果の集計・分析を行う。

以下、第2節において、調査方法、対象、質問項目と回答項目など、アンケート調査の具体的な内容を述べる。第3節では、コーヒーや緑茶などを含む一般的な飲料に対する嗜好についての集計結果を示すとともに、

飲料の嗜好と年齢との関連性をまとめる。第4節では、緑茶に対する回答の詳細な集計結果を示す。特に、緑茶を好む人とそうでない人の間の違いに着目して集計・分析する。第5節に、本報告で明らかになった点をまとめる。

2 アンケート調査の内容

形式はウェブ・アンケートであり、サンプル数は800である。質問項目には、回答者の属性情報として、年齢、都道府県、性別、結婚、職業、業種、世帯年収、子供の有無が含まれている。年齢を10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上とカテゴリ化したとき、30代以外はすべて男性57人・女性57人であり、30代については男性58人・女性58人である。その他の項目についてはコントロールされていない。

一方で、飲料に対する嗜好についての質問の中で、本稿で集計対象とした項目は以下のとおりである。

[Q1] あなたの好きな飲み物について、次に挙げるものの中での順位を教えてください。該当しなければ、回答できる順位までで結構です。

1. コーヒー

2. 紅茶
3. 日本茶
4. それ以外のお茶
5. 水
6. 清涼飲料水
7. その他

[Q2] あなたは緑茶をどれくらい飲みますか?以下の場合について、解答欄 A~D それぞれについてお答えください (カップ・湯呑などで飲む場合を想定しており、ペットボトル1本 (500cc) は2杯に換算して数えてください。緑茶を飲まれない方は0と入力してください)。

1. 一週間につき、自宅で **A** 杯くらい飲んでいる。
2. 一週間につき、職場で **B** 杯くらい飲んでいる。
3. 一週間につき、外出先で **C** 杯くらい飲んでいる。
4. 一ヶ月につき、カフェ等で (有料の緑茶を) **D** 杯くらい飲んでいる。

[Q3] あなたが緑茶を飲む際の方法について、次に挙げるものの中で頻度の高いものの順位を教えてください。該当しなければ、回答できる順位までで結構です。

1. 茶葉からいれる (急須等を使う)
2. ティーパック
3. ペットボトル
4. 給茶機やティーサーバー
5. 粉末
6. その他

[Q4] あなたが緑茶を飲む理由について、次に挙げるものの中での順位を教えてください。該当なければ、回答できる順位までで結構です。

1. 自宅でゆっくりしたいとき
2. 外出先で飲料が欲しいとき
3. 健康のため
4. 経済性のため
5. 習慣になっている・飽きが来ないから
6. 緑茶自体を楽しみたいから
7. その他

[Q5] 緑茶を選び・飲む際に重視する「緑茶の特徴」について該当するもの全て選択してください。

1. 渋味
2. まろやかさ
3. うまみ
4. 甘味

5. 滋味
6. 色
7. 香り
8. 飲む際の温度
9. リラックス・やすらぎ効果
10. 清涼感
11. 健康への影響
12. 産地・銘柄
13. 価格
14. その他

[Q6] 静岡茶・知覧茶・宇治茶・西尾の抹茶・八女茶・伊勢茶について、次に挙げた中であてはまるものを、それぞれ選択してください。

1. 名前を聞いたことがある
2. 産地や特徴を知っている
3. 飲んでみたい
4. 飲んだことがある

[Q7] 次のうち、緑茶の居別とであなたが参加してみたいものをすべて選択して下さい。

1. 緑茶とお菓子の試飲試食会
2. 様々な緑茶の飲み比べ
3. 専門家による美味しい緑茶の淹れ方講座
4. クッキーやケーキなど緑茶のお菓子・加工品試食会
5. 芸術や自然の鑑賞と緑茶の試飲会
6. 健康管理と緑茶の講演試飲会
7. 抹茶ラテ、ほうじ茶とのブレンドなど緑茶をベースとした飲料の試飲会

3 飲料の嗜好について

まず、[Q1]において、各飲料について、好きな順位を1位として選択した人数を図1に示す。図の横軸は回答番号である (例えば、1はコーヒーを表す)。縦軸は、各飲料において、好きな順番を1位として選択した人数である。図1より次のことが分かる。

- コーヒーを最も好む人が最も多く、人数としては352人で全体の44[%]にあたる。
- 2番目に多く選択されているのは緑茶であり、184人で全体の23[%]である。
- 3番目以降については、紅茶・それ以外のお茶・水・清涼飲料水の順であるが、これらの選択数はほぼ同程度である。

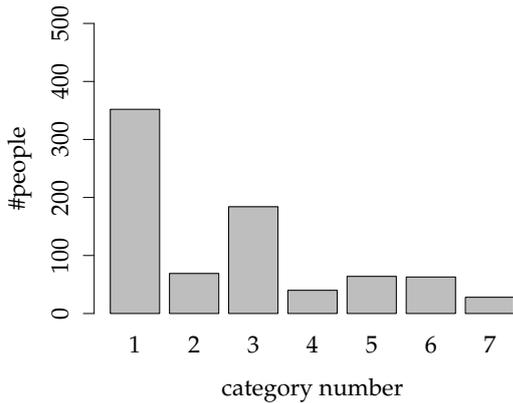


図 1: 好みの飲料の分布 (第 1 位として選択)

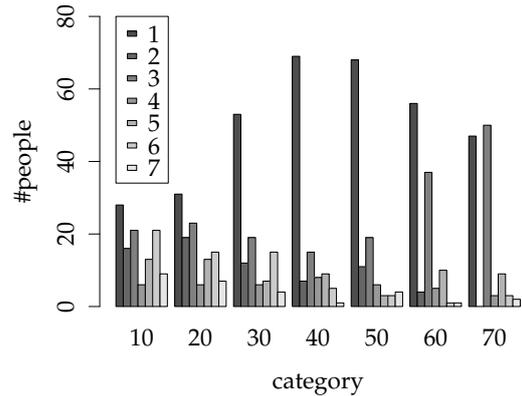


図 3: 好みの飲料の分布 (年代別)

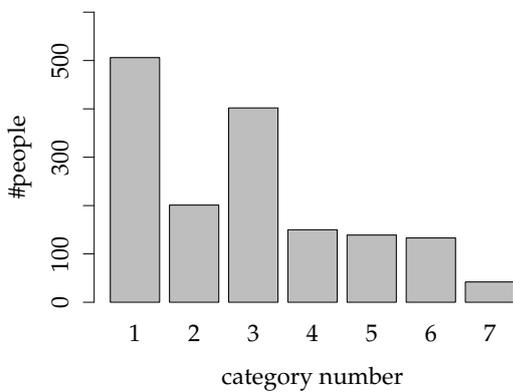


図 2: 好みの飲料の分布 (2 位までに選択)

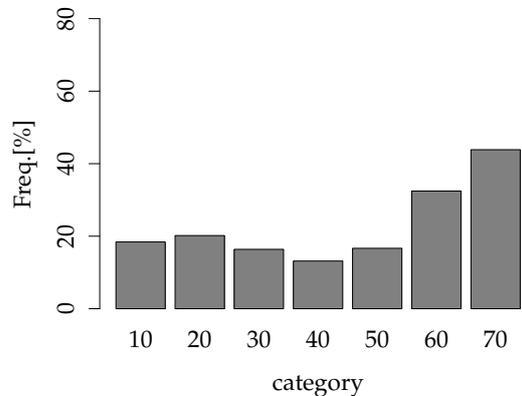


図 4: 緑茶の最も好む人の割合 (年代別)

なお、各飲料について、順位を 2 位以上で選択している人数を図 2 に示す。コーヒーについては 502 人、緑茶について 402 人となっており、緑茶を好む傾向にある人は比較的多いことが分かる (1 位のみしか回答していない人もいるために正確に割合として算出することはできない)。

図 1 について、年齢別に表示したものを図 3 に示す。ここで年齢はカテゴライズしてあり、例えば、10 は 10 代を意味する。ただし、70 は 70 代以上のカテゴリである。また、各年代で、緑茶を最も好む人の割合を図 4 に示す。図 3 および図 4 より次のことが分かる。

- 70 代以上を除いて、コーヒーを最も好む人が最も多い。70 代以上においては、緑茶を最も好む人が最も多い。
- 10 代と 70 代以上を除いて、緑茶を最も好む人の人数は 2 番目に多い。10 代については、緑茶と清涼飲料水について同数となっている。
- 紅茶は若年層に好まれる傾向にある。
- 10 代と 20 代では飲料の嗜好がばらついている。

- 30 代以上ではコーヒーを好む傾向にあり、特に、30 代から 50 代までは、他の飲料と比較して、その傾向が顕著である。60 代については、コーヒーが最も好まれているが、それより若い年代と比較して、緑茶を好む傾向にある。

- 60 代と 70 代は緑茶を最も好む人の割合が比較的高い。30 代～50 代はその割合が 10 代・20 代より低い。

なお、1980 年代にコーヒーの消費量は緑茶を上回り、その後もコーヒー飲料を含め増加している (例えば、<http://coffee.ajca.or.jp/>)。現在 60 歳であれば、1980 年当時は 20 歳である。こうしたことを考えると、60 代以下にとっては、緑茶よりもコーヒーが嗜好飲料としてはメジャーであったと考えられる。これは、50 代以下と 60 代以上の年代に応じた違いの一つの要因となり得る。ただし、年齢に応じた飲料の嗜好性の変化も考えられ、この点については別の調査が必要である。さらに、30 代～60 代については、職場や外出先にいることが多いと考えられる。そうした場合、コーヒーについては、ペットボトルだけでなく、缶やコンビニエンス・ストアによる購入など年間を通じて安価

かつ手軽に飲むことができる。こうした環境がこの年代での飲料の嗜好性に影響している可能性もある。この点については、[Q3]の分析と関連して、後に述べる。一方で、10代や20代における飲料の嗜好性にはばらつきがある。この原因としては、社会的な傾向として「飲料の多様化」と「流行り」が影響していることや、年齢に応じた飲料の嗜好性の変化などが考えられるが、原因の特定には別の調査が必要である。

4 緑茶についての集計

以下では、主に、[Q1]において緑茶を1位に選択している人とそうでない人との違いについての集計結果をまとめる。前者のカテゴリをTF、後者のカテゴリをTNFで参照することにする。また、前者を単に「緑茶を最も好む人」、後者を「緑茶以外を最も好む人」という呼び方をすることにする（あるいは「緑茶を最も好む人とそうでない人」という分け方で呼ぶことにする）。ここで、TFの人数は184人、TNFの人数は616人であり、TFの人数は比較的少ない。このため、TFについての結果は若干バラツキを有することを留意しておく必要がある。

4.1 緑茶の好みと属性情報

緑茶を最も好む人とそうでない人について、属性情報との関連性を対応分析により見てみる。その結果のバイプロットを図5に示す。

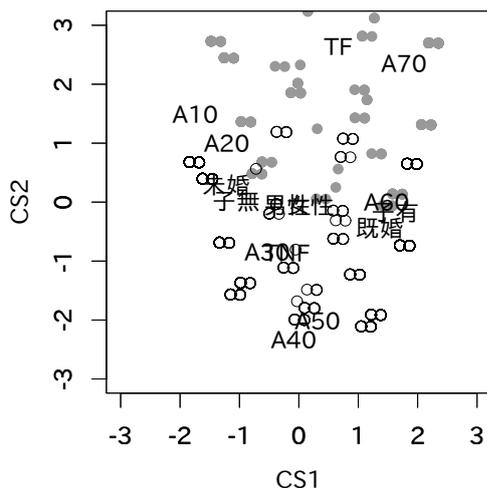


図 5: 緑茶の好みと属性の関係

属性情報は、既婚・未婚、子有・子無、男性・女性の別および年齢である。年齢については前節に述べたカテゴリ分けを採用している。図中のマーカーはデータの配置であり、グレーのマーカーについては緑茶を最

も好む人、白いマーカーについてはそうでない人である。寄与率は0.345であり、それほど高くないが、次に述べるようにデータの傾向はある程度表している。まず、第1軸(CS1)は、年齢について10代~70代以降が昇順で並んでおり、年齢に対応する軸となっていると考えられる。このとき、未婚・子無は負の値、既婚・子有は正の値に位置している。これは、年齢が高いほど既婚・子有の頻度が高いことに由来する配置である。一方で、第2軸(CS2)は、その配置から、TFとTNFを分ける軸となっていると考えられる。このことは、グレーのマーカー(緑茶を最も好む人のデータ)については、第2軸の値が正となる傾向が強いことから明らかである。特に、70代以降はTFに近い右上に配置されており、緑茶を最も好む傾向が比較的高い。一方、30代、40代および50代は、図3の結果から、コーヒーを最も好む傾向が顕著であり、このため、緑茶を最も好む人の全体に対する割合は低くなっている。したがって、バイプロット上は顕著に第2軸の値が負の位置に偏ったと考えられる。60代については、右のやや上あたりに配置されており、30代~50代と比較すると、比較的緑茶を好む傾向にあると考えられる。こうした傾向も図3の結果と一致する。また、10代・20代については、第2軸の値が正の方向であり、30~50代と比較すると、全体に対する緑茶を最も好む人の割合は高いと考えられる。これも図4の結果と一致する。ただし、30代~50代と10代・20代の差はそれほど顕著ではない。なお、男性・女性ほぼ原点付近に位置しており、緑茶の好みは男性・女性であまり差がないと考えられる。

4.2 [Q2]の集計

図6に、[Q2]の質問項目1~3に対する集計を箱ひげ図として示す。「TF(TNF)+質問項目」は[Q1]に対して緑茶を最も好む人(そうでない人)に対する[Q2]の質問項目に対する値を意味している。例えば、図中の「TF1」の箱ひげ図は、[Q1]に対して緑茶を1位で選択している人の[Q2]の1番目の質問項目の回答の値(緑茶を飲む量)の箱ひげ図である。箱ひげ図のヒゲは、四分位範囲の1.5倍であり、その外側のデータは外れ値として表示していない(ただし、明確に外れ値としてよいかは判断が難しい)。図において、TF1とTNF1の場合が他より多い人数であり、このことは、緑茶を最も好むかどうかに関わらず、一般に、自宅で飲む量が多い傾向にある。また、いずれの場面においても、緑茶を最も好む人の方がそうでない人より多く飲む傾向にあり、妥当な結果であると言える。特に、自宅での量の差(TF1とTNF1)は顕著である。緑茶を最も好む人は、自宅など定常的

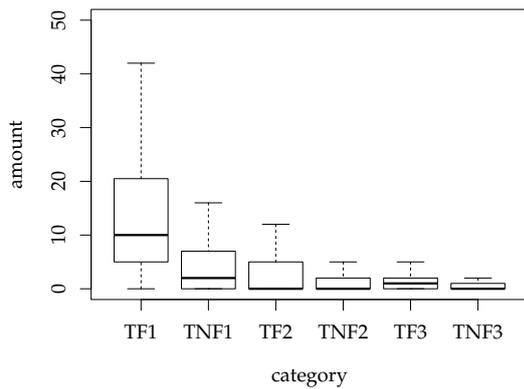


図 6: [Q2] に対する回答の箱ひげ図

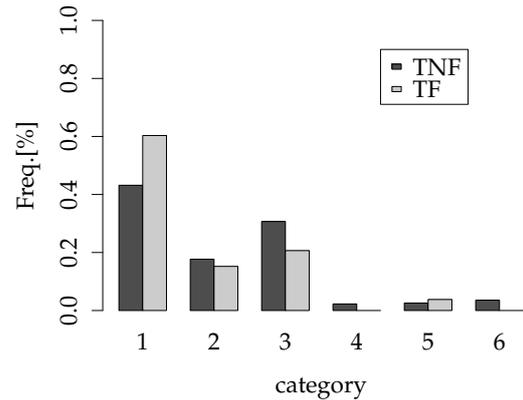


図 8: [Q3] の各項目の選択数

に居る場所において、頻繁に緑茶を飲んでいることが分かる。

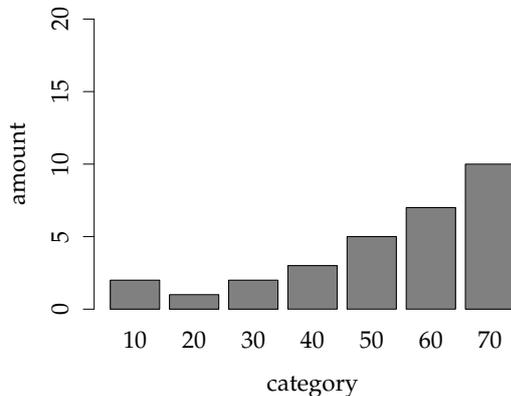


図 7: [Q2] の 1. に対する回答の年代別の中央値

一方で、自宅で飲む量の中央値を年代別に集計したグラフを図 7 に示す。横軸は年代である。この図から、自宅で飲む量は 10 代を除けば年齢が上がるにつれて多くなっていることが分かる。特に 70 代以上で比較的多くなっており、これは緑茶を最も好む人も 70 代以上で多いことから妥当である。なお、10 代について若干飲む量が多くなっている理由としては、家庭において緑茶が習慣的に出されていることも考えられる。

4.3 [Q3] の集計

[Q3] の各項目について、1 位に選択している項目の人数を緑茶を最も好む人とそうでない人で比較する。図 8 に人数を比率として表す。図の横軸は 1 位に選択されている回答番号である。また、各項目を選択している人数を TF の場合は 184 で、TNF の場合は 616 で割って比率として示している。

緑茶を最も好むかどうかに関わらず「茶葉から入れる」(項目 1) という回答数が最も多く、次いで、「ペットボトル」(項目 3) という回答が多いという傾向は共通する。ただし、「茶葉から入れる」を 1 位に選択している人の割合は、緑茶を最も好む人の場合 6 割程度であるが、そうでない人の場合は 4 割程度であり、前者の方が高い。「ペットボトル」については、緑茶を最も好む人の場合 2 割程度であるが、そうでない人の場合は 3 割程度であり、後者の方が高い。すなわち、比率として比較したとき、緑茶を最も好む人よりそうでない人の方が「茶葉から入れる」割合は低く、「ペットボトル」で飲む割合は高い。緑茶以外を最も好む人が「茶葉から入れる」割合が比較的多いが、これには、家庭内で習慣的に出されている場合も考えられる。また、緑茶以外を最も好む人でも、ペットボトルの緑茶は購入する傾向にある。これは、図 6 において、外出先で緑茶を飲む量について、緑茶を好むかどうかであまり差がみられなかったことと対応すると考えられる。まず、年齢層が高くない人は、仕事やレジャーで外出が多くなると考えると、外出先でペットボトルで緑茶を飲む場合が多くなると考えられる。一方で、緑茶を最も好む人の年齢が高かったことを考えると、そうした人はペットボトルで飲むケースは比較的少ないと考えられる。

4.4 [Q4] の集計

[Q4] の各項目について、[Q3] と同様な集計を行い、それを図 9 に示す。図から「自宅でゆっくりしたいとき」という回答が緑茶を最も好むかどうかに関わらず多数を占めている。これは、緑茶に対して一般的に求められているものと考えてよい。また、この結果は、Q3 において緑茶を「茶葉から入れる」人の割合が緑茶を最も好むかどうかに関わらず高かったことと対応する。

一方で、緑茶を最も好む人は「習慣になっている・飽きが来ないから」の選択頻度が比較的高い。

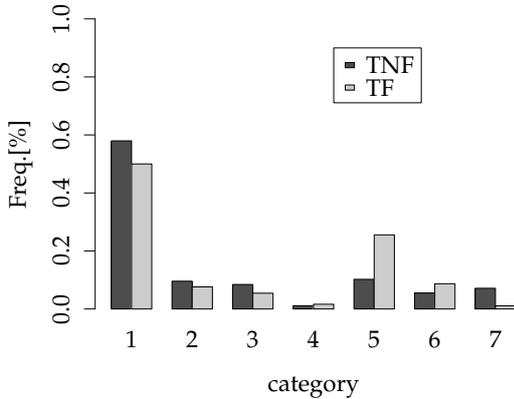


図 9: [Q4]の各項目の選択数

直感的には、[Q3]と[Q4]の回答の間には関連性がありそうな項目が見受けられる。ここでは、その一つを調べる。

まず、[Q3]の項目1を1位としている人（茶葉から入れる頻度が高い人）と[Q4]の項目1を1位としている人（自宅でゆっくりしたいときに緑茶を飲む人）のクロス集計表を表4.4に示す。この表において、1は各項目を1位としている人、0はそれ以外の人を意味する。このクロス集計表より、「茶葉から入れる頻度が高い」と「自宅でゆっくりしたいときに緑茶を飲む」ことは関連性が高いと考えられる。実際、カイ二乗検定の p 値は 6.28×10^{-8} であり、統計的にもこの二つの項目の独立性は低いと言える。ここでは示さないが、同様に、例えば、外出先で緑茶を飲む場合はペットボトルで飲む場合が多いこともデータから言える。

表 1: [Q3]項目1と[Q4]項目1のクロス集計

		[Q4]-1	
		0	1
[Q3]-1	0	224	199
	1	127	250

4.5 [Q5]の集計

[Q5]は複数選択可としてあるので、ここでは、各項目について、緑茶を最も好む人とそうでない人のカテゴリごとに選択人数を集計し、それぞれをカテゴリ全体の人数(TF:184人・TNF:616人)で割って割合を算出する。項目ごとの割合を図10に示す。

緑茶を最も好む人については、主なものとして、うまみ(項目3)・香り(項目7)・まろやかさ(項目2)・渋み(項目1)の順で選択されており、そうでない人

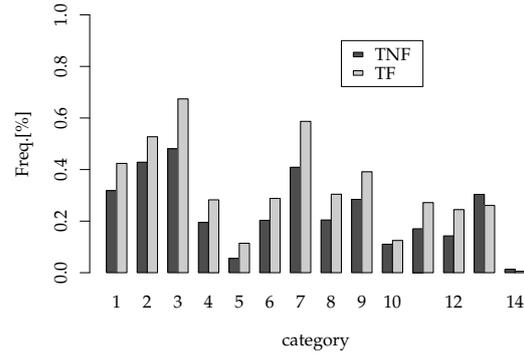


図 10: [Q5]の各項目の選択頻度

については、うまみ・まろやかさ・香り・渋みの順で選択されている。両者とも重視する緑茶の特徴についての傾向は似ているが、緑茶を最も好む人は「香り」を比較的重視し、そうでない人は「まろやかさ」を比較的重視する傾向にあることが分かる。これらの特徴の中でも、「渋み」は「うまみ」や「まろやかさ」より若干選択頻度が低く、緑茶に対して一般的に口当たりの良さのようなものが求められる傾向にあると考えられる。また、多くの項目で、緑茶を最も好む人の方がそうでない人より選択頻度自体が高くなっている。これは、緑茶を最も好む人が多くの特徴を重視する傾向にあることを意味する。すなわち、緑茶へのこだわりが回答にあらわれており、緑茶の特徴について興味をもって楽しんでいることを意味すると考えられる。

4.6 [Q6]の集計

1:静岡茶, 2:知覧茶, 3:宇治茶, 4:西尾の抹茶, 5:八女茶, 6:伊勢茶の各お茶について、[Q6]の質問項目1(名前を聞いたことがある)と質問項目4(飲んだことがある)に対する回答を[Q5]の場合と同様に図11と図12に示す。横軸は上記の産地(緑茶)の番号である。

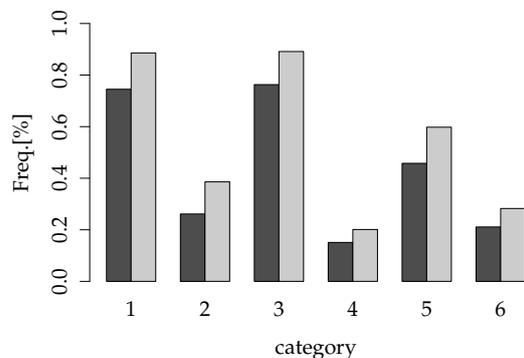


図 11: [Q6]の項目1の選択頻度

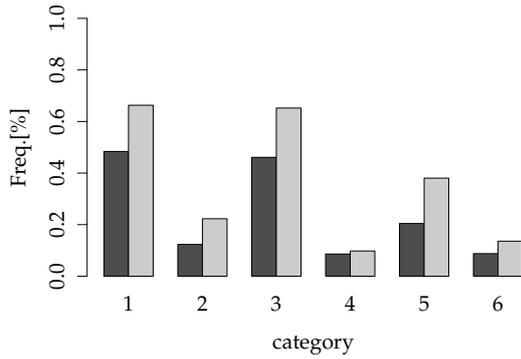


図 12: [Q6] の項目 4 の選択頻度

当然ながら、いずれの緑茶についても、飲んだことのある方が知っている方より頻度は低い。まず、「名前を聞いたことがある」については、宇治茶、静岡茶、八女茶の順で頻度が高く、「飲んだことがある」については、静岡茶、宇治茶、八女茶の順で頻度が高い。ただし、静岡茶と宇治茶の差は小さい。図から、伊勢茶については、それらと比べると知られていないことが分かる。特に、お茶を最も好む人であっても伊勢茶についてはそれほど知られていないという結果である。ここで、全体として、緑茶を最も好む人の方がそうでない人より選択頻度が多い点は、緑茶に興味があるであろうという意味で、妥当な結果である。

4.7 [Q7] の集計

[Q7] は緑茶の嗜好とはあまり関係ないように思われるが、以下に述べるように、むしろ緑茶を取り立てて好むわけではない人の傾向が見られるため、興味深い。[Q7] は複数選択可としてあるので、ここでは、各項目について、緑茶を最も好む人とそうでない人のカテゴリごとに選択人数を集計し、それぞれをカテゴリ全体の人数（184人と616人）で割って割合を算出する。項目ごとの割合をを図 13 に示す。

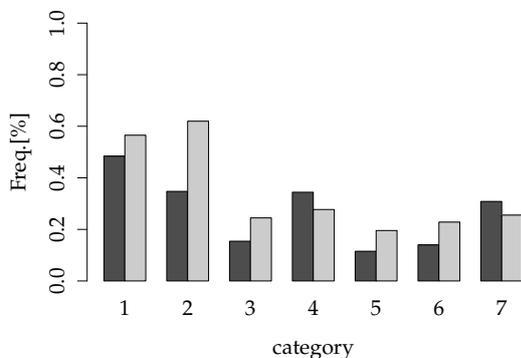


図 13: [Q7] の各項目の選択頻度

この結果から、緑茶を最も好む人とそうでない人の

両方で、お菓子と組み合わせた試飲試食会（項目 1）は選択頻度が同程度に高い。一方で、様々な緑茶の飲み比べ（項目 2）については、やはり、緑茶を好む人の方が選択頻度が明確に高く、その頻度は 6 割程度ある。一方で、緑茶を使ったお菓子の試食会（項目 4）と抹茶ラテやほうじ茶とのブレンド茶などの試飲会（項目 7）では、若干であるが、緑茶を最も好むわけではない人の方が選択頻度が高い。この結果は、緑茶をとりたてて好むわけではない人は、緑茶自体に物足りなさを感じている可能性があることを示唆していると考えられる。これは緑茶に関するイベントを考える場合に有益な情報であるだけでなく、単純に緑茶のクオリティを上げるだけでは、緑茶を一般に普及させることは難しいことを示唆している。

5 おわりに

本稿では、飲料、特に、緑茶の嗜好についてのアンケート結果の集計を行った。その結果を以下にまとめる。

- 年代別の飲料の嗜好についての集計から、60 代以下ではコーヒーが最も好まれており、緑茶はコーヒーに次いで好まれている。ただし、70 代については緑茶の方が若干好まれる傾向にあった。特に、30 代～60 代ではコーヒーの人気は非常に高く、緑茶は 60 代以上で好まれている傾向が分かった。一方で、20 代以下では飲料の嗜好がばらついていることも分かった。
- 緑茶は自宅で飲まれる傾向にあり、特に、緑茶を好む人は自宅で頻繁に飲んでいる実態が明らかとなった。また、上記と関連して、高い年代ほど自宅で飲む量が多いことが分かった。
- 全体として、緑茶は茶葉からいれて飲む人が多く、次いで、ペットボトルで飲む人が多い。ただし、緑茶を好きな人は茶葉からいれて飲む傾向が強く、そうでない人はペットボトルで飲む傾向にあることが分かった。
- 全体として、緑茶を飲む理由は、自宅でゆっくりしたいときという回答が最も多く、緑茶を好む人については、習慣になっている・飽きが来ないからという回答が比較的多かった。一方で、質問間の関連性の集計から、茶葉からいれて飲むことと自宅でゆっくりしたいときに飲むことの関連性は高かった。
- 重視する緑茶の特徴としては、一般に、うまみ・香り・まろやかさ・渋みが選択されており、渋みより口当たりの良さを優先する傾向にある。また、緑茶を好む人は香りを重視する傾向にある。

- 緑茶に関わるイベントについての結果から、緑茶を好む人は緑茶自体を楽しむイベントを選択する傾向にある一方で、そうでない人は緑茶だけに注目するイベントを選択する傾向が低いことが分かった。

今回は、緑茶を好む人とそうでない人の比較をする形でアンケートを集計したが、アンケート結果には、まだ抽出できていない多くの情報が含まれている。特に、年齢別の分析や緑茶をとりたてて好むわけではない人の傾向の分析などを通して、緑茶の普及に役立てることができると考えている。

謝辞

本アンケート結果を提供頂いた三重県地方自治研究センターおよび地域ブランド取り組み研究会（平成31年度～令和2年度）のメンバーの皆様に感謝します。